

第246回

「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」(令和7年10月)句会記録

夏がいつまでも去らないと、挨拶の冒頭には口にしている、時折吹いてくる風の端々に、秋は着実にやって来ているようです。JR 新橋駅前の烏森口辺りは、相変わらずビジネスマン、オフィスレディの往来が激しく、午後一時頃の新橋周辺の雰囲気は、10年前と何も変わっていないように思います。会社が要求している使命がいつも頭脳の中を占めているでしょう。それに引き換え俳句のことだけを考え、固まりつつある老いた脳細胞がどこかで、柔らかに喋れ、柔らかに生きよと口走っています。

「元気に百歳」クラブの俳句サロン「道草」に学ぶこと十数年。教室のある新橋に月に一度通っています。今は俳句を学ぶことが、生きる喜びになっています。

10月の句会に出席した方々は8名、天候の落ち着きと共に、徐々に充実した句会になることを期待しています。10月の句会に投句された方々は下記の通りです。

10月投句に参加された方(13名)

芦川創風さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、高瀬荻女さん、辻 柴楽さん、手嶋錦流さん、原 晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然。

句会に参加された方(8名)

和感さん、一光さん、月草さん、荻女さん、晶如さん、傘吉さん、多佳さん、白然。

本日の優秀句並びに獲得票数

10月の優秀句、並びにその中から天賞に推挙された句、最多得票賞(☆印)の句は、下記の通りです。

◎『濡れ縁に一葉落として風去りぬ』	傘吉	天3☆6
◎『送り火の跡残る門奥の声』	白然	天2㊦4
◎『書くほどにペンに秋思の募りたる』	白然	天1☆6
◎『湯に浮かぶ名月掬い身に纏ふ』	柴楽	天1㊦4
◎『影踏みて歩む傍に秋の風』	月草	天1㊦4
◎『昼飲みの同期の五人秋刀魚くふ』	晶如	天1㊦2
◎『溪谷は秋のマジック只見線』	柴楽	天1㊦2
◎『去り難し秋好日の立ち話』	傘吉	天1㊦2
◎『一面の朝霧の中峠越え』	一光	天1㊦2
◎『恥じらいの色は濃くなり酔芙蓉』	晶如	天1㊦1

今月の最多得票獲得句、最多天賞獲得句は、いずれも傘吉さんの句「濡れ縁に一葉落として風去りぬ」が獲得しました。句会では「一葉落として」が、季語になるのかという質問も出ましたが、「一葉落として」は、桐の葉が落ちる様子を表し、秋の訪れを知覚する季語として使われています。言葉の読みとしては、一葉は「ひとは、いちよう」どちらも良いようで、ただ、桐の葉が一枚落ちることを、詠まれたということは知っておいた方が良さそうです。

そしてもう一つ、「濡れ縁」ですが、「濡れ縁」は濡れている縁台ではなくて、雨戸の外に作られていて、いつ濡れてもよいように作られた縁台です。ですからこの句の鑑賞としては、風が落としていった桐一葉と、その風はそのまま去っていったという寂寥感を詠

み込んで居ます。秋の寂しさが辺りに漂っている身に沁みる秀句です。

次に柴楽さんの句「湯に浮かぶ名月掬い身に纏う」は、露天風呂での景がはっきりと見えてきます。掬った名月のお湯をお身体に纏われたとは・・・、見事な表現をなさいました。この句には秋の詩がある秀句です。ただ、伝統的俳句と言われる文語体の俳句にするならば、「掬い」は「掬ひ」であり、「纏う」は「纏ふ」ではないでしょうか。

もう一つ、余計なことが浮かんだ句がありました。それは晶如さんの句「昼飲みの同期の五人秋刀魚くふ」です。この句は普通、「食（く）ふ」か、「食（た）ぶ」などと表現すると思いますが、晶如さんは「食ふ」を仮名にして「くふ」にされました。どこが違うのかPC検索をしてみました。句の中で「食ぶ」と表現することは、謙譲の意味を持たせていることのように感じ、また「食ふ」は「お仲間などの飲み会に使う言葉」のようです。同期会とは、またぴったりですね。ただ、「くふ」と「ひらがな」にされたのはどうしてでしょう。この辺りは心を鬼にして、「食ふ」で、良かったのではないのでしょうか。

小川軽舟著『名句水先案内』の中から8月の名句を二つ

6月の句会記録でも紹介させていただいた小川軽舟著「名句水先案内」の8月の項で、二人の俳人の句を鑑賞しました。ひとは宇多喜代子さん（1935年生）と、もうひとは寺井谷子さん（1944年生）です。日本は1945年に二つの原子爆弾投下により敗戦し、二度と戦争をしないことを宣言しました。

八月の赤子はいまも宙を蹴る 宇多喜代子

八月がくるうつせみうつしみ 寺井谷子

この終戦の年は、宇多さんは10歳、国民小学校4年生だったでしょうし、寺井さんは誕生日が来て1歳であったと思います。宇田さんも寺井さんも幼い頃から俳句に傾注された方なのですが、宇田さんは2011年の東日本大震災の折に、寝転んで空蹴りをしていた赤ん坊が、無抵抗に逝ってしまった話を聞き、大人の罪を思い知らされたのだと思います。「いまも宙を蹴る」赤子の宿命が、脳裡に刻み込まれます。宇田さんは東日本大震災の被災地を訪ねてまとめた連作中の一つに「短夜の赤子よもつともつと泣け」があります。「赤子よ、頑張ろうね」という応援句です。

寺井谷子さんは、子供の時から俳句の環境に恵まれ、九州小倉で外科医をなさっていたお父さん（横山白虹）、お母さんが俳人でありました。寺井さんはもの心がついて、あの長崎への原爆投下（1945年8月9日）が、もし小倉の天候条件が良ければ、小倉に投下されたことを知ります。当日の小倉は雲に覆われていたため、B29は長崎に向かいました。そして、小倉に投下されていたら、自分自身が世に存在しなかったのではないかとの衝撃を受けます。上述の句「八月がくるうつせみうつしみ」は、中七下五で2音足りません。まるで呪いを唱えているような「うつせみうつしみ」は、「空蟬、現身」と、もしあの日に小倉の天候が良ければ、自分の存在はなかった。2音の不足という中途半端は、寺井さんの生涯について回る条件でもあります。

今年の夏休みは重たいけれど、奥の深い勉強をさせていただきました。

（白然写）